
俺が女であいつは

夏川逢樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が女であいつは

【Zマーク】

Z9366C

【作者名】

夏川逢樹

【あらすじ】

小さい頃から女の子らしく育てられた夏樹。^{なつき} 親友の海美^{みみ}と新学期学校へ。学校帰りに夏樹に思わぬハプニングが…！それで前世の記憶が蘇るのだが…！？

男女誕生ー！？？（前書き）

出来れば最後まで読んでください！

男女誕生！？？

「大変です！」

「どうしたんだ、騒々しい…。」

「そ、それが、ナンバー933の天人あまとが！…！」

「ナンバー933は今日現世へ行く予定である？それ
がどうした。」

「はいっ、それが実は…。」

あたしは小さい頃から、バレエ、ダンス、ピアノ、バイオリン…と、
女の子らしい習い事しかやつた事がない。

小さい時に一度だけ、バスケがしたいと言つたことがある。そしたらお母さんは、「あのスポーツは男の子がするものなのよ」と言つた。

友達のマキはやつてるのにズルイって思つたけど、あの時はそれ以上言えなかつた。

それだけじゃない。

あたしが、青の壁紙が良いつて言つたら、「青は男の子の色よ、女の子はピンクなのよ」って壁紙はピンクになつた。

確かそれが4歳の頃の話。あれから10年…あたしは“女道”を歩んできた。

何であたしばかり…って思つ時もあつたけど…今じゃもう、すっかり慣れちゃつた。

中学は男女共学の公立中学校に入った。本当は私立の女子中に入らせそうだったんだけど、あたしが受験に失敗したから入らずにすんだ。あの時は泣いたけど、今は共学に入つて良かったと思つてる。だって好きな男子もできだし、あっちもあたしに気があるみたい。

友達も沢山いるし、本当幸せ！――

「夏樹一、海ちゃん來てるわよー！」

一
はあ
い
！」

タタタと階段を駆け下りる。

ト元に手を掛け大声で叫ぶ

「行つてらつしゃい、氣をつけてね。」

外に出ると、今日

A 1

卷之三

た。

夏樹、年寄り臭い……！」

えり、たゞて今田の空が綺麗すぎなんだもん

何それ

語したがはるた等
にしわじみ

海の本名は錦戸海美、たけどあたしは小さい頃から海って呼んでる。

う。
信じてもらえそうな可愛い顔。女のあたしでもドキッてしちゃいそ
てたせいで髪は胡桃色をしてる。アイドルです、つて言えばそれで

「夏樹ー？聞いてたー？！」

え、じゅん。おひに回すからー。」

「一も！」

ふうっとほっぺを膨らませぶーぶー言つてゐる海。

「あのねつ、今日からあたし達中3でしょつーだから、もう先輩も居ないし清々できるよねつ。」

「えー！海、先輩の事そう思つてたんだ…。今日メールしておこひ。

「あ、冗談だよー！ねつ？！だからメールしちゃ嫌あ～～～

！」

本氣で頼む海。もー、焦りすぎだよ。

「嘘だよー、からかつただけ。」

「ひどつ！」

あー、もう本当にからかいようのある子だよ～。

「クラス同じだと良いねー。」

急に話題を変えて海に振ると…

「え？！あ、そうだね。うん、また4人が良いな。」

「あたしと、海、すーに末代！！」

あたし達4人は、1年の時から同じクラス。それもすく仲良し。そんな、新しいクラスの事を話していたりもつ学校。

「あー、同じクラスですようつー！」

もうクラスは決まつていてるのに、お祈りする海。

「何か、こういつのつて緊張する～。」

校門から学校に入ると新しいクラス名簿が配られていた。

「おはよう。はい、これ。」

先生から紙を受け取り、自分の名前を探す。

「…………あ、あつた！あたし4組だ。海は？！」

「…………あたし…3組。クラス別々になつちやつたね。」

「えーーーー！そんなあ。中学校最後なのにいー！」

「本当にがつかり…。」

2人で文句を言いながらそれぞれの教室に入った。

「あつ！！！夏樹ー！」

「え？すーー？何で？？」

「ひどーいークラス名簿見てないの？一緒にクラスなんだよ～！」

「えー、やつた――！」

海と違うクラスでがつかりしてて同じクラスの人見てなかつた。

よく見れば、1年の時に同じクラスだった人が多い。

「末代は海と同じ3組になつたんだよー！」

「そりなんだよー！じゃあ、2対2に別れたね。」

「そりなんだよー。しかも、あつちは姫で、こつちはヤローみたい

な。」

海はアイドル並にかわいい。けど、末代は赤い淵のめがねが似合う、いわゆる萌え仔。

それに比べ、昔から女の子らしく育てられたのにあたしはどうも男っぽい。最近髪を肩まで切つたらますます男っぽくなつた。

すーは外見は女の子らしいのに喋り方は男みたい。

「やだねー、それ。せめて男女にしてほしかつたよー！」

「そーだなー！ははつ。」

「海ー！3組終わつたー？」

「うん。今行くね。」

海はクラスの子ともう仲良くなつたみたい。皆が、えへもう帰るの一？なんて言つてる。

「さつ、帰ろう！末代とすーは、一緒に帰つた？」

「うん。さつきね。2人は空手あるんだつてー。」

2人は小2から空手を習つてゐる。あんなかわいい顔して空手できるつて、絶対身を守るためだよね……。

「夏樹のクラスはどう、楽しい？」

「うん。楽しいよー…皆よく喋るし、それに今日なんてねー…」

その時だつた。あたしの耳に一言…「危ないっ…！」って聞こえた。え？つて思つたらもう手遅れ。

「ガンッ！…！」

「～～～ツーーー？」

あたしは海の方を向いて話していく気付かなかつたんだ。
電柱に。

あたしは思い切りそれにぶつかつた。

「大丈夫！？」

「……うん……。」

頭がガンガンする。

その後あたしは海に支えてもらい家に帰つた。

すぐにベットにもぐり込んだ。頭がガンガンする……。

その後あたしは深い眠りについた。

『いいですか……？あなたはとてもまれにみるケースなのですよ？本來ならば現世へなんてもつての他！それをお許し頂けたのですから、感謝しなさい。』

『そうですよ！私達も出来るだけのことはしますから。母親は女を中心から欲しがつておられます。』

『何せ、現世で男だつたあなたが女に生まれ変わるなんて……通常は、女は女に。男は男に生まれ変わるんですからね。』

『そうだ。万一、前世の記憶が蘇りでもしたら……。我々は現世には行くことが出来ぬから、お前がどうにかせんといかんからな……。』

目が覚めた。変な夢だ。俺は伸びをして1階に下りた。
洗面所で顔を洗おう……。

「えつ……？」

鏡に映つているのは見慣れたいつもの顔……なのに俺じゃない。
水がゴーッと流れるように記憶が俺の頭で渦を巻く。

「そうだ俺、生まれ変わったんだ……。」

夢だと思つてたのは天国での会話^話。

あの時俺は女に生まれ変わろうとしていた。でもそんな事は珍しいから管理長に呼ばれた。注意を受けて女に生まれ変わった俺。

「俺は夏樹[…]。女。」

言い聞かせるように言つてみた。

前世の記憶が戻った今、俺は女だけど男もある[…]。

一体、俺の性別はどうなんだ！？

男女誕生ー！？？（後書き）

「メントを出来れば下さーい。
これからが面白いので楽しみにして待っていてください。

新しい生活？？！（前書き）

フツーな毎日を送っていた夏樹。
ある日、ひょんなことで前世の記憶が蘇ってしまう。
一体夏樹わこれからどうなるの？！

新しい生活？？！

「た、大変です！！！」

「うん？どうした。」

「14年前の、ナンバー933をお覚えですか？」

「ああ、確か男なのに女に生まれ変わる事になってしまつた坊やであろう？」

「はい…。実はそのナンバー933は、夏樹という名前の女に生まれ変わつ

たんです。」

「ふむ…。で、その娘がどうしたのか？」

「それが…、つい先程男だった時の記憶を思い出したそうですね…！」

「な、なんと…！！！」

「ど、どうしましょ？？！」

「これは面倒な事になつた…。」

俺はずつと考えた。

今の状況を整理してみた。

俺はついさっきまで、女の「夏樹」だった。それが、（多分）電柱に思いつ切りぶつかつたせいで前世の男だった記憶を思い出しました。

現在の俺は女。けど、前世が男だったから記憶を思い出した俺の精神は男だ。

つまりは、男女になつたつて訳。

あ、でも、前世の記憶を思い出したからって精神が女だった頃の記憶は有る。

うん：複雜。

「夏樹ー！朝ご飯できたわよー。」

- はい!

h?

無意識のうちに答えていた
そいか 昨日は答えてたら眠っちゃう
よ。

「
h
」
! !

大きくのびをして制服に手を伸ばす。

「えっ！？」

手を伸はした先にあつたのは...セーラー服!?

あそぶ

નાના

「夏樹ー？早くしないと冷めるわよ。ー」

下から毎さんか呪ふ

はあ、い、今行く！

急便一制用一春都元

井、一
心女だしな。

タタタつ。階段を駆け下りる。

「はよー！ 朝ごはん何？」

はあー。とあくびをしながらリビングに入る。

おにゅう……ひとし寝癖よ？先に直して来なさい

髪を片手で触つてみる。

ん！！ボンバー！！洗面所に直行する。

「うへ～。ひどい髪型だー！」

鏡を見たら、全部の髪の毛が好きな方向を向いていた。

「中々直らない……」

「ひんひん」

鼻歌を歌いながらリビングに向かう。

おしゃべり！ 最高だよ

ん？リヒンケで聞こえる可愛い声、絶対母さんじゃないな？

「んー、腹痛。」飯田

「え？ 海…？ 何で居るの。」

本当に驚き！何で家に海が居るの？！

「谷田は早く家を出てきたの」 そしたらおはさんが『餓食へてきなつて）。夏樹、あたしが入つて来たの気付かなかつた？』
俺は髪を直すのに必死で、全然海に気付かなつかつたんだ。

「そーか！んじゃあ、一緒に食べつかなー！」

えりこ：何　その喰り方　変だよ！」

卷之三

「ひん。それならいいけど。

何とかごまかした。これから気を付けないとな。

「ちよこと!! また2人共居るの?! もう8時よ
いしの?」

思の文

思わず二人でハモった

卷之三

鞄を持つて、ご飯も食べずに玄関にダッシュ！

「ご馳走様ー！行つてきます。」

海が先に外に出る。

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい。2人共氣をつけてね。」

扉が静かに閉じた。

「うへ。腹が…。」

さつきから俺の腹は鳴りっぱなし。

「なつきつ…！」

「あ、すーじやん。」

「ぐ〜〜〜」

あ…、腹が…。

「え、今のつてもしや夏樹だつたりする？」

「あ、はは〜。今日朝抜いたんだよ。そしたらもう鳴りっぱなしで

…。」

やー、流石に今のは恥ずかしい。しかも俺は女なのに。

「え？！朝食べてないの？」

「うん。」

すーはびっくりした顔で俺を見る。すーが男っぽくて良かつたなーなんて思うよ。

これがもし海や末代だつたら俺の顔は真つ赤だつたらうなー…。

「夏樹、これ…。」

そう言つてすーが俺にこそつとあるものを渡した。

「えつ、これ…。」

俺がすーから受け取つた物は、チヨコレートだつた。

「こんなんじやあ腹の足しにもならないけどね〜。」

「そんなこと無い！すっげー嬉しい。」

「

す一つで優しいな。こんな時に友達の有難みを知る俺。

「夏樹、今日は何か違うね…。話し方男っぽいよ。」

ぎくつー男っぽいすーここまで言われるなんてね。

「そっ、そう?きつと何にも食べてないからだよ。」

精一杯女の子らしく返事をすると、すーは「ふ~ん」とビビりでもよさそうに返事をした。

放課後、海と一緒に帰ろうと思つて(と言つたり約束している) 3組の教室へ向かった。

海のクラスはまだ先生がペラペラと何か話していた。
仕方ない、廊下で待つかーとか思つていたら、「おっす」って声をかけられた。

「え?」って振り向くと。
「何か久しぶりだな~。」

「と、智樹ーーー?ーーー?」

新しい生活？？！（後書き）

どうも読んでくださいありあついー　です。
できれば感想下さい。次回は急転回を迎えますーー！（あ、でもまだ終わらんよ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9366c/>

俺が女であいつは

2010年10月17日02時50分発行